

樋口一葉「にぎりえ」論

——「人魂」となつてさまようお力の〈無念さ〉——

前田 角藏

序、お力の〈無念さ〉へと誘うテキスト

「にぎりえ」『文芸倶楽部』一八九五・九）は「たけくらべ」『文学界』一八九五・一〜一八九六・二）連載中に書かれた樋口一葉の代表的な短編小説である。あらすじはこうである。

上野に近い新開地にある銘酒屋菊の井の「一枚看板」の酌婦であるお力は、もとは町内でも幅の利いた蒲団屋の源七と深い仲だった。しかし、源七は落ちぶれて、今や裏長屋で女房お初、息子の太吉と暮らしている。お力は、自分のせいで落ちぶれてしまったと思ひこみ、ふさぎ、客としてやってくる源七と会おうともしない。お力は酌婦としての罪におびえるだけでなく、どのように生きていけばいいのかわからない悩みを抱え込むようになっていく。そんな時、お力は、結城朝之助という上客につき、逆上せて好きになるとともに、自分のこの苦しい胸の内を聞いてほしいと約束する。七月十六日の約束の夜、好きで好きでたまらない結城に、「三代伝はつての出来そこね」とわが心の〈悩み〉〈苦しみ〉や身の〈不幸〉〈哀しみ〉を語り、婉曲に救いを求める。しかし、結城はお力のサインを読み違え、逆に源七との愛を貫けと励ます。お力は心の折れる長い沈黙の後、突然、結城を泊め、結城を新しい情夫とする。その翌日、お力は、ある種の高揚感から偶然見つけた源七の息子太吉にカステラを買い与える。しかし、突然のお力のこの好意が、その後、想像もできない波紋を生み出していく。カステラをお力の誘いと勘違いした源七の妻お初はカステラを裏の空き地に捨て、それを自分への当て付けと思ひ、激怒した源七は、女房子供を追い出してしまふ。最終章の八章は、その後、数日たったの出来事である。語り手は、お力と源七との心中の顛末を菊の井界隈の噂を伝録する形で語り終わる。

「にぎりえ」は、梅雨の時期に物語は始まり、その数ヶ月後、昔の情夫である男に切られて死ぬというよくありそうな酌婦の哀しい物語である。ただ、注目したいのは、語り手がこの不幸な酌婦お力の物語を、最終章（八章）で「恨は長し人魂か何かしらず筋を引く光り物のお寺の山といふ小高き処より、折ふし飛べるを見し者ありと伝へぬ」と語っていることである。そこからは、源七との心中が納得の上でのものでなく、成仏できずに「人魂」となつてさまようお力の〈無念さ〉が伝わってくる。「にぎりえ」は、死んだお力の〈無念さ〉へ読者を誘ひ込む構造をもったテキストであるといえよう。

しかし、奇妙なことだが、この八章の顛末記の中に、〈お力と結城〉の恋物語が一言も触れられることもなく、消去されているのである。一体、誰が何故消したのであるうか。菊の井界隈の町の人々なのか、それとも、噂を収録したはずの語り手の意図的な見逃しなのであるうか。

これまでの「にぎりえ」論は、管見する限りで言えば、この排除された〈お力と結城〉の恋物語を視野に入れながらお力の〈無念さ〉を読むという具合にはなっていないようだ。

（注二）理由の一つとして、八章とそれ以前の章とでは、大きな語りの落差、変質があり、読者は、それまでの章の内的なドラマの必然に従って八章を読むことをできないという状態に置かれて、なかなかこの〈お力と結城〉の恋物語の排除という事態に気がつかないということが考えられよう。しかし、理由はそう単純ではないようだ。（注二）

一、お力とはどういう女か——〈愛の自然性〉あるいは演じる性

「にこりえ」は語られていない空白の曖昧な〈領域〉を多く持つテキストである。例えば、誰でも、「にこりえ」を読めば、お力が、「源七一家の幸せを考えると、今の自分の源七への恋の思いをあきらめることが一番だと考え」（渡部芳紀、「にこりえ」論（注三））ていることはわかるだろう。しかし、その後がよくわからなくなっていくのである。お力は源七との出会いによって酌婦としての罪の意識を持ち、しだいにアイデンティティそのものを喪失するような危機に陥り、悩んでいくのだが、本心ではお力は源七をどうしたいのか、また、いつの間にか、その心の〈悩み〉が何か遺伝的な〈病〉でもあるかのようにわが家の系譜の中で語りはじめたりして、源七問題とのかかわりが見えにくくなっていくこと、また、何を結城に語ろうとしたのか、さらに、突然、結城を強引に泊めたのはどうしてなのか、また、お初離縁から心中事件にいたるプロセスがカットされ、いきなり八章では死んだお力の心中伝説となるなどまことに語られない空白の領域の多いテキストなのだ。そもそも、お力とはどういう女なのだろうか。

お力の働いている店の看板は「御料理」とあるもののそれは表向きで、実体は安い売春宿ということである。語り手は、このお力が、この店の「一枚看板」で、「年は随一若けれども客を呼ぶに妙あり」といい、しかし、「存の外やさしい所」がある〈女〉であるとその魅力を語っていく。この「新開」では、お力のことを知らない人はいないほどで、「菊の井のお力か、お力の菊の井か」といわれ、「さては近來まれの拾ひもの、あの娘のお蔭で新開の光りが添はつた、抱へ主は神棚へさゝげて置いても宜いとて軒並びの羨み種になりぬ」といったお力の評判ぶりを語る。ところで、この評判の酌婦お力が、この数ヶ月後に男と心中事件を起こして死ぬという運命を辿ることになる。

お力は瞬間的に客を本気で好きになり、逆上してしまうところがある。それが、男をその気にさせる。しかし、お力は、一方で、その逆上せの言葉を信じて店に通い詰め、果ては身代までつぶしてしまうことに平気でいられないやさしい感性を持った女であった。他の女たちは酌婦という存在に自己卑下はあっても、存在自体の〈悪〉に罪に悩んでいるところがない。しかし、お力は、そうではなかった。ただ、そういう存在にお力は悩みながらも何とかこれまでこのアンビバレンツな状況を乗り越えてきたのであった。ところが、曖昧屋の〈虚〉の世界と〈実〉の世界との区別がつかず、蒲団屋の旦那から土方の手伝いをしてその日を暮らす貧しい状態になっても、懲りずに菊の井のお力に会いに来る男の登場によってお力のアンビバレンツな状況に亀裂が走り、存在自体の〈悪〉に罪に深く悩むとともに、「身の行き方」そのものが分からなくなってきたのであった。

さて、そんなことでお力が苦悩していた頃の雨の日、「山高帽子の三十男」が菊の井に客として始めてやって来る。強引にお力に引き留められて客になり、お力の魅力に翻弄されていくことになる。男の名は結城朝之助、無職業、妻子なし。「遊ぶに屈強なる年頃」で、週に「二三度の通ひ路」というからなかなか道楽者である。お力はその結城に逆上せあがり、「三日見えねば文をやるほど」逆上せていく。周りは「源さんが聞たら何うだろう気違ひになるかも知れない」というほどになる。ただみんなはしばらくするともう源七のことなど誰も気にしない。「男振りはよし気前はよし」、さらには「出世をなさる」結城に、菊

の井の女たちは、お力が「奥様」になるかもとささやき、今度は結城と結ばれることを期待する。いわばお力と結城の仲は公然の秘密なのだ。結城もまた、真面目にお力を好きになつていて、「奥様にしてくれろ」といつてほしいと思つている。ところが、なかなかそうならず、結城はいらいらする。お力のじらし戦法ではなく、源七への〈思い〉を完璧に断ち切ることができなかったからである。結城もその辺はよく知つており、「お前に思ふ事がある位めくら按摩に探らせても知れたる事」といい、「何なら此処へでも呼び給へ、片隅へ寄つて話しの邪魔はすまいから」とまで言う。そのとき、お力は、源七には「女房もあり子供もあり、私がやうな者に逢ひに来る歳ではな」いのだといい、「逢つては色々面倒な事もあり、寄らず障らず帰した方が好い」こと、「恨まれるは覚悟の前、鬼だとも蛇だとも思ふがようござります」と苦しい胸の内を語る。ただ、そう強気なことをいいながらも、去りゆく源七を眺めて虚脱気味のお力を語り手は見ており、結城も「持病といふのは夫れかと切込」み、お力も「まあ其様な処でござんせう、お医者様でも草津の湯でもと薄淋しく笑つて居る」ところから、お力の「持病」「頭痛」の原因が源七にあることも明らかである。

しかし、「色の黒い背の高い不動さまの名代」のようで、「人の好いばかり取得」の源七にどうして惚れたのかと言え、お力は「大方逆上性のほせしやうなのでござんせう」とさりと答へ、逆に話をそらすかのように、結城に、「貴君の事をも此頃は夢に見ない夜はござんせぬ、奥様のお出来なされた処を見たり、びつたりと御出のとまつた処を見たり、まだ／＼一層もつとかなしい夢を見て枕紙がびつしよりに成つた事もござんす」という。そして、お力は、自分の「思ふ事」〓〈悩みごと〉は、「お分かりに成りますまい」といい、「私が身位かなししい者はあるまい」と寂しそうに語り、自分の過去や家族のことなど話すこともなく、「貴君には聞いて頂かうと此間から思ひました、だけれども今夜はいけませぬ」と腰をおり、「あの水菓子屋で桃を買ふ子がござんしよ、可愛らしき四つ計の、彼子が先刻の人のでござんす、あの小さな子心にもよく／＼憎くいと思ふと見えて私の事をば鬼々といひまする、まあ其様な悪者に見えまするか」と逆に結城に尋ねるのだ。語り手はお力の「堪へかねたる」「空を見あげてホツと息をつくさま」を語り、お力がいかに深い罪意識の中でのたうち回り、その罪意識を太吉に対していかに過敏に働かせているかを暗示している。(注三)

お力の〈悩みごと〉とは、「逆上性」とそれによつて生じる出来事である。もともと、お力は酌婦の仕事上から誰にでもその気にさせる〈演じる性〉を生きており、男を「無間地獄」へとくわえ込むことを〈愛の自然性〉として發揮できる「名人」であった。しかし、源七という客が特に好きになり、その男の家庭崩壊という事態がはつきり見え始めるにつれてお力は、酌婦の原罪性に悩むようになっていた。語り手によれば、お力は、「折ふしは悲しき事恐ろしき事胸にたゝまつて」きているが、「床の間に身を投ふして忍び音の憂き涕」しており、実際は、「障れば絶ゆる蜘蛛の糸のはかない処」がある女であり、人目には明るく強く振る舞っているだけだと語る。ただ、結城に追求されたその日は、心の〈悩み〉の全てを結城に語ることはなかった。もちろん、後で分かるように、お力は源七問題でのみ苦悩していたわけではなかった。源七問題を通して、罪の意識だけでなく、それを越えて何が幸せなのか、何のためにいきているのかといったアイデンティティの問題に直面し、深い混乱の中にあつたのだ。盆に近づくとつれ、源七がストーカー的行動を強め、狂いと約束したのでお力は危機感を抱き、七月十六日の夜、結城にすべてを「聞いて頂かう」と約束したのだ。

二、お力と細谷川の「丸木橋」

七月十六日、結城と約束した日のことである。お力は、恋人当てゲームの最中、「我恋は細谷川の丸木橋わたるにや怕し渡らねばと謳ひかけしが、何をか思ひ出したやうにあゝ私は一寸無礼をします」といつて消える。お力は、ここで源七との恋を思い出し胸が詰まったのだとひとまず考えられよう。源七と話をつけなければならぬことはわかっている。太吉のことを思うと「鬼姉さん」という「悪者」になることは出来ず、源七と縁をきつぱり切る覚悟もできている。しかし、そう思いながら決定的なアクションを取ることなく、ずるずる引き延ばしていた。

「行かれる物なら此まゝに唐天竺の果までも行つて仕舞たい、あゝ嫌だ嫌だ嫌だ、何うしたなら人の声も聞えない物の音もしない、静かな、静かな、自分の心も何もぼうつとして物思ひのない処へ行かれるであらう、つまらぬ、くだらぬ、面白くない、情ない悲しい心細い中に、何時まで私は止められて居るのかしら、これが一生か、一生がこれか、あゝ嫌だ嫌だと道端の立木へ夢中に寄かゝつて暫時そこに立どまれば、渡るにや怕し渡らねばと自分の謳ひし声を其まゝ何処ともなく響いて来るに、仕方がない矢張り私も丸木橋をば渡らずばなるまい、父さんも踏かへして落してお仕舞なされ、祖父さんも同じ事であつたといふ、何うで幾代もの恨みを背負て出た私なれば為る丈の事はしなければ死んでも死なれぬのであらう、情ないとても誰れも哀れと思ふてくれる人はあるまじく、悲しいと言へば商売がらを嫌ふかと一ト口に言はれて仕舞、ゑゝ何うなりとも勝手になれ、勝手になれ、私には以上考へたとて私の身の行き方は分らぬなれば、分らぬなりに菊の井のお力を通してゆかう」

これは、「にぎりえ」の中で最も重要な場面の一つである。お力は、逃げ出したかった。何処かと言えば、「人の声も聞えない物の音もしない、静かな、静かな、自分の心も何もぼうつとして物思ひのない処」というのである。ナンバーワンを張りながら、しかし、その一方で崩れていく男とその家庭への優しいまなざしを持つお力の酌婦としてのアンビバレントな引き裂かれるような生の苦しみ、そして、それだけでなく、何が幸せなのか、何がためにいきているのかのアイデンティティの問題に直面し、自分自身が見えなくなっているところから逃げ出したかったのである。恋の歌が宙づり状態の〈今〉の自分の姿を照らし出し、結城との約束のことも何も忘れて発作的に逃げ出したのだ。

それにしても、「我恋は」の歌によって〈外〉へと逃げてきたお力は、またその歌によって現実へと連れ戻される。今度は、逃げるのではなく「細谷川の丸木橋をば渡らずばなるまい」と思う。どうせ、「幾代もの恨みを背負て出た私」であるから、「為る丈の事はしなれば死んでも死なれぬ」と思い、ともかく逃げないで踏みとどまろうとする。それが、「菊の井のお力を通してゆかう」ということであつた。お力は、「此様な身で此様な業体で、此様な宿世で、何うしたからとて人並みでは無いに相違なければ、人並の事を考へて苦勞する丈間違ひである」うから、これまでのように、あれこれ人間らしいことを考へても仕方がないと考え、菊の井の酌婦お力である〈今の今〉を生きていこうとする。あれこれ懊惱

したあげくやつとお力は酌婦としての「私」の「行き方」にたどり着いたのだ。ただ、一種の心神喪失の状態で闇夜を彷徨い、〈内〉と〈外〉、〈実〉と〈虚〉の境界さえ曖昧模糊とした状況を彷徨ったお力は、「唯我れのみは広野の原の冬枯れを行くやうに、心に止まる物もなく、氣にかゝる景色にも覚えぬは、我れながら酷く逆上て人心のないのにと覺束なく、氣が狂ひはせぬかと立どまる」ほどであった。いわば、アイデンティティを喪失して一種の統合失調症的症状さえ読み取れよう。しかしその時、約束通りやつてきた結城が声をかけ、お力は正氣をやつと取り戻したのであった。(注五)

三、お力の決断——お力の告白と結城の誤読——

お力は、七月十六日の夜、まず、「私が身の自墮落を承知して居て下され」と述べ、自分の「浮氣者」性を結城に告白する。お力は本気で男が好きになる逆上性があると自白しつつ、しかし、「持たれたら嬉しいか、添うたら本望か、夫れが私は分りませぬ」と語る。そして、「此様な浮氣者には誰れがしたと思召」と問いかけ、酌婦という商売のせいでそうなたたとは言わず、「三代伝はつての出来そこね」で、「氣違ひ」の家系からきていると語っていく。お力は「親父は職人、祖父は四角な字をば読んだ人」だといい、祖父は、頑固者で、〈義〉を貫き、父は〈技〉を誇り筋を通して生きたこと、しかし、「氣位たかく」て誰からも相手にされない〈貧〉の一族であったこと、そしてその末席に酌婦としての自分があるのだと結城に語る。さらに、お力の家の〈貧しさ〉の極めつきとして、「七つの年の冬」の米こぼしのエピソードを語る。

「端たのお錢を手握つて米屋の門までは嬉しく駆けつけたれど、帰りには寒さの身にしてみても足も亀かみたれば五六軒隔てし溝板の上の氷にすべり、足溜りなく転げる機会に手の物を取落して、一枚はづれし溝板のひまよりざら／＼と翻れ入れば、下は行水きたなき溝泥なり、幾度も覗いては見たれど是れをば何として拾はれませう、其時私は七つであつたれど家の内の様子、父母の心をも知れてあるにお米は途中で落しましたと空の味噌こしさげて家には帰られず、立てしばらく泣いて居たれど何うしたと問ふて呉れる人もなく、聞いたからとて買ってやらうと言ふ人は猶更なし、あの時近處に川なり池なりあらうなら私は定し身を投げて仕舞ひましたる、話しは誠の百分一、私は其頃から氣が狂つたのでござんす」

お力は、このときの絶望的な〈貧しさ〉の悲しさは語り尽くせないという。しかし、実は、これこそ、酌婦である〈今〉の自分の始まりだったと語ったのである。(注六)

お力の語りを通して見えてくるのは、〈貧〉故に酌婦のほか何者にもなれるはずがない自己の宿命的な〈哀しみ〉である。「名人だとして上手だとして私等が家のやうに生れついたは何にもなる事は出来ないの御座んせう、我身の上にも知れます」というお力の絶望的なつぶやきである。そこには、酌婦という「鬼」Ⅱ〈悪者〉の境遇から抜ければ幸せになれるという幻想はない。すでに父母をなくして自力でいきざるをえないお力はどうあがいても酌婦の位置から脱けられそうもなく、お力は、そういう自分を「物思はしき風情」の中でそう語ったのである。お力が「貴方には聞いて頂こう」としたのは、男に瞬間的に逆上

せ、好きになり、しかし、妻などになるのが幸せなのかどうかわからないという矛盾し、分裂した「気違ひ」というほかない自分の心のありようである。七歳の時から始まっている自分が自分でないという感じはここにきて飽和に達しどうすることもできなくなっていたのだ。語り手は、お力が語った後の静寂を「物いはぬ事小半時、坐には物の音もなく酒の香したひて寄りくる蚊のうなり声のみ高く聞えぬ。」と述べる。聞いていた結城もどうしていいかわからず、三十分もの長い〈沈黙〉の時間が流れている。

ところで、このお力の宿命論的な自己像を聞いた結城は、「お前は出世を望むなど突然だしぬけに」言う。お力は、そう言われて、まず「彗ツと驚きし様子」を見せるが、「私等が身にて望んだ処が味噌こしが落、何の玉の輿までは思ひがけませぬ」と打ち消す。正直なお力のコメントであろう。その返答に対して、たまたみかけるように、結城は「嘘をいふは人に依る始めから何も見知つて居るに隠すは野暮の沙汰ではないか、思ひ切つてやれ／＼」というのである。お力が、「あれ其やうなけしかけ詞はよして下され、何うで此様な身でござんするにと打しをれて又もの言はず。」となるのも当然だろう。誰にも話したことのないお力の心の深い〈悩み〉は結城には受け止められなかったのである。どうして、〈貧〉故にどうあがいても脱けられないのだという絶望感は伝わらなかったであろうか。

お力が簡単に「奥様」にしてと結城にいえなかった心の〈悩み〉、コンプレックスを語れば語るほど、結城には、源七との〈恋の「丸木橋」を渡れない〈悩み〉〉として受け止められ、その励ましとして、源七と一緒になれというエールを結城は送る。もちろん、お力はこのエールに深い絶望感を味わっている。お力は源七との恋の復活を目指していたわけはなかったからだ。

しかし、お力は結城のこの誤読に落胆しつつ、ついに語ることを止めて、今夜は返さないとという行動に出る。実は、ここのは、「にぎりえ」の最大の空白である。お力のこの転回理由もまた何も語られていないからだ。しかし、お力の真意がどこにあったかすでに明らかである以上、この実力行使はそれほど異常な行動でもなかった。好きで好きでどうしようもない結城に、菊の井の酌婦お力でしかありえない自分を「わかつて」と叫んでいるのにそのサインを見逃すほどに、この男が全く鈍感で、無頓着で、あまりにもお人よしであっただけである。(注七)そこで、お力は、自分からしたいことをしてみせるほかなかった。心の秘密を語った〈私〉||お力は〈あなた〉||結城に酌婦としての「為る丈の事」をしたまでであった。お力は、源七との過去を捨て、菊の井の酌婦お力として、結城との〈恋の「丸木橋」を渡ろうとついに飛んだのである。(注八)

四、消された〈お力と結城〉の物語と〈語り手〉

結城を泊めた翌日のお力の行動はすばやいものであった。カステラは、坊やへのプレゼントではあるが、それは間接的に源七への別れのシグナルでもあった。(注九)「何処のか伯父さんと一処に来て」お力から太吉にカステラがプレゼントされた段階で、源七はお力の心変わりを悟ったはずである。しかし、源七の怒りは、直接お力に向かうのではなく、まずはカステラを庭に捨てたお初に向かう。お初は、夫の甲斐性としての女遊びを認め、自分はその夫に尽くすという古いタイプの女であるが、お力との〈愛の幻想〉に呪縛されていた源七にはお初の行為はあてつけに見え、許すことができず、一挙に離縁にまでいつて

しまうことになる。自力でその幻想から抜け出る能力をなくしていた源七は、結城川新しい情夫の情報によって外部から崩され、妻の離縁、そして裏切ったお力への憎悪から殺害、自刃へと自滅していくほかなかったのだ。数日後、お力は源七に惨殺される。(注二〇)しかし、〈お力と源七〉との心中事件の顛末の噂は「諸説みだれ」で〈藪の中〉という状態に置かれ、お力が新しい「情夫」として結城を決めた、お力の主体的な恋の〈丸木橋〉の話は見事に消されてしまったのである。

なぜそのようなことが行われたのであろうか。

お力の死は、「菊の井は大損」しただけでなく、「新開の光り」が消えたことでもあり、かなり衝撃的なニュースであったはずである。しかし、このニュースは通俗的に言えば、一人の酌婦が一人の男に入れあげたが、新しい恋人ができ、狂った男が女を殺してしまったということになるのか。これはあまり格好のいい話ではなく、むしろ隠しておきたい部類の話であろう。実際、お力の棺は、「菊の井の隠居処よりしのびやかに」出されている。一般に、曖昧屋では、酌婦が一人の男に入れあげていくのはタブーで、みんなに均等に色気を振りまくことが求められるだろう。ところが、そうでもないという噂が広がればお店にとって大変マイナスだし、「新開」にとってもそうだろう。ましてや、新しい男を次々と「無間地獄」へ連れ込むというたちの悪い酌婦の話になればなおさらであろう。真相は隠蔽されなければならなかったし、それはこの菊の井界限の暗黙の合意でもあったろう。こうして、お力惨殺の事件は、よくある心中事件として流布され、真相は「諸説みだれ」る形で隠蔽されたと考えられる。心中ということになれば、そこになんらかの同意があったようにみなされ、少なくとも看板酌婦の殺害という毒々しさは薄められるはずである。

それにしても、八章の語り手は、「諸説みだれ」た心中事件の噂を取り上げながら、最後に、「恨は長し人魂……」のお力人魂伝説を書き添えたのであった。少なくとも、この書き添えによって、心中の噂そのものが相対化され、噂の半分は嘘であり、お力は源七との心中を納得していなかったことが照らし出され、「見事な切腹」、「ゑらさうに見えた」「死花」は反転して男の身勝手な人殺しと自殺ということになる。ここには、酌婦お力の主体的な恋の〈丸木橋〉の物語を消去してしまった菊の井周辺の世間に対する語り手の怒りと抗議が示されているだろう。もつとも、はじめからこういう戦略性にもとづき語り手あるいは作者は語っていたのかと言えば、そうだと断言できない。たいした戦略性があったわけではなく、七章までの語りをそのまま持続するゆとりがなかっただけだという意見もあろう。しかし、その詮議は別稿に譲るとして、ここでは、偶然にせよ書き上げられた現行のテキストから読み取れるものを最大限引き出すという姿勢を貫いており、そこから見るとこのように見えるということである。そして、その限りで言えば、「にこりえ」の語り手はかなり自覚的に物語を語っていたのだと結果的にはなるのである。語り手が噂にひびを入れることによって、そこから身勝手な男によって殺された「可愛そうな」お力の〈無念さ〉が「人魂」となって読み手の脳裏にいつまでも刻まれることになるのである。

それにしても、お力と結城の公然の秘密でもあった〈恋物語〉が菊の井周辺の噂の中から消されたのは、商売上の不都合といったレベルからだけなのであろうか。

一般に、何者からも拘束も束縛もされない自由な一対の男女が相思相愛の関係になるというのが近代的な〈恋愛〉というものである。しかし、その先には〈一夫一婦制〉〈妻〉〈家〉という制度的なものが想定され、上昇、出世Ⅱ価値、幸せ、生き甲斐といった価値システムが人々の意識を呪縛しつつあった。例えば、四迷の『浮雲』のお勢、鴎外の『舞姫』のエリスなどは、この制度や価値システムに浸食されつつあり、その枠内での自分の幸せが脅かされることへの恐れこそ最大の関心事であった。しかし、「にこりえ」のお力は、そういう制度や価値システムの枠内から外され、そもそもその枠への幻想さえもなくなっている女であった。その点で、お勢やエリスとは決定的な差異があった。ただ、そうでありながら、自殺することも逃亡することもなく、酌婦として生きようとしていた。そうするほかなかったからである。そしてそこで、寄り添おうとした男が結城という男であった。結城は、週に二三度、この菊の井の店に遊びにきているのだから、性を買うという「男性の加害者性」(北田)は明らかである。(注一一)しかし、男と女の関係は、性の〈加害者性〉という関係でのみ成り立っているわけではない。結城にはこの店からお力を身請けするという考えもあつたようだが、かたくなに自己を語ろうとしない謎の女お力に惹かれ、お力のしたいこと、やりたいことをやらせようという姿勢に変わっていく。結城はお力の悩みを聞く聞き手となり、お力もまたそういう結城が好きになり、信頼を寄せ、他人に語ろうとしなかった心の秘密を打ち明ける関係へと進展していく。もちろん、一人は、〈酌婦―客〉という関係であるのだが、男と女の横の信頼関係も生まれ、「うつとり」見つめるようにもなっている。こういう関係性を「男性の加害者性」一般でかたづけられるわけにはいかない。これまでのお力は、男に瞬間的に逆上せながら、「人情」と「義理」との絡みの中で、自己を見失い、優柔不断になり、結果としてますます男を泥沼へと引きずりこんできた。しかし、ようやく菊の井の酌婦お力として、「人情」や「義理」に呪縛されずに〈虚〉と〈実〉の境界をはっきりさせ、その上で自分の愛の自然すなわち「逆上」の自然性にまかせてともかく生きようとしていたのだ。(注一二)

周知の如く、お力は、源七問題を抱え込みながら、一方で、「三日見えねば文をやるほど」結城に逆上せ、「夢に見ない夜はごさんせぬ」ほどであった。これは明らかに「浮気者」で「気違ひ」的であり、お力はその物狂い性を家の系図の中で納得しようとしていた。しかし、考えてみれば、客に逆上せるというのは酌婦の必要要件であり、まして売れっ子となればなおさらであろう。これまでのお力は、逆上せと「人情」と「義理」との間で自己を見失い、赤坂からこの新開へと流れてきたのではないか。「人情」と「義理」にふりまわされ、〈虚〉と〈実〉の境界を自ら溶解させてもきたのであった。しかし、やっとお力はこの負の連鎖を断つことの大切さに気がついたのであった。そこで、結城の泊め置きとカステラによる源七との別れへとようやく踏み込んだのである。もとより、結城との愛は、〈家〉、〈妻〉〈二夫一婦制〉とは無縁な「菊の井」という場所に限定された枠内でのみ可能な〈愛〉というべきものであろう。実際、〈悪場所〉で働かざるをえない女はまず上昇、出世Ⅱ価値、幸せ、生き甲斐といった価値システムと結びついている〈一夫一婦制〉〈妻〉〈家〉から疎外されており、それだけに、〈家〉〈妻〉〈二夫一婦制〉に呪縛されない幻想としての男と女の〈愛の空間〉に救いを求め、そこで夢を持つとうとする。「にこりえ」のお力もまた、そのような幻想としての〈愛の世界〉の中でしか生きられない女の一人であった。もちろん、そこから脱けて「出世」(妻になること)を求めることもできるが、お力はすでに断念して

いた。源七との〈恋〉を通して〈丸木橋〉を渡った向こうにあるのは、自分の幸せだけでなく、太吉のような不幸があることを知っていたからである。ただ、お力には、「為る丈の事はしなければ死んでも死なれぬ」という〈恋〉への強い思いがあり、その恋の思いは、最終的に、新しい情夫として結城を決定するということになった。しかし、皮肉なことだが、〈家〉〈妻〉（一夫一婦制）に呪縛されていない限りで、お力の幻想としての〈愛の空間〉は、当時の最も近代的な〈恋愛〉の先端を走っていたと言えるのだ。それだけでなく、その愛の関係が女の主導権のもとに行われていた。この愛の形は男の無頓着によって余儀なくされたものではあったが、その愛の形は、〈家〉〈妻〉（一夫一婦制）そのものの背後にある男の権力性・支配性と対立しており、ある意味でそれを壊しかねない危なさを持つていたと言える。お力の結城への恋の物語は受け入れられるはずもなかったのだ。その意味で言えば、「にぎりえ」のお力は、そんな両義的な空間で生きていることなど想像することもなかった男源七の身勝手な暴力によってつぶされただけでなく、菊の井界限の噂の中で、心中という男の美学へ回収され、消去されたとも言えよう。どうやらお力は二度殺されたといえる。一度は源七によって、もう一度は菊の井界限の噂によってである。そして、この二度の〈お力殺し〉によって、お力が結城との関係のうちに求めていた〈家〉、〈妻〉（一夫一婦制）とは無縁な男と女の瞬間的な幻想としての〈愛の世界〉とその可能性もまた奪われたのであった。もともと、そのような〈愛の世界〉を夢みたのは、菊の井のような〈悪場所〉が本質的に女の性を売買する不条理な空間だったからであるが、二度の〈お力殺し〉はその〈悪場所〉空間への本質的な批判をもた封ずるものでもあった。

一葉は、菊の井のような〈悪場所〉で働かざるをえない女が自殺も逃亡もせずそこで生きるためには、〈家〉〈妻〉（一夫一婦制）に呪縛されることのないこのような両義的な、幻想としての男と女の〈愛の空間〉が必要であることをよく知っていた。それは酌婦にとつて夢であり、救いでもあった。貧しさ故に酌婦として生き、しかもそういう愛の形でしか生きられない女たちの存在と哀しみを一葉はよく知っていたのだ。

一体、お力は、二度の〈お力殺し〉によって菊の井界限の噂の中で「人魂」として伝説化されていた。しかし、八章の語り手はそれを逆手にとって、伝説を生成する場所へと降り立ち、そこでの世間や社会や男たちの都合、暴力と対抗としようとした。そこに、お力の〈無念さ〉を語ろうとする語り手の思いがあり、その思いは語り手の背後にいる一葉の思いでもあった。（注二三）北村透谷は、「厭世詩家と女性」（『女学雑誌』一八九二・二・一六、二〇）の中で、「恋愛は人世の秘鑰なり、恋愛ありて後人世あり、恋愛を抜き去りたらむには人生何の色味かあらむ」と〈恋愛〉至上主義ともいえるべき恋愛の大切さを述べた。しかし、一葉は、底辺に生きる女性の世界に降り立つことで、もつと深いところで、〈恋愛〉という観念にすがってしか生きられない女の深い悲しみ、不幸、闇を見つめていたのである。

（注二）語りの構造的な変化、落差に着目するとすれば、例えば、前田愛が『「にぎりえ」の世界』（『立教大学日本文学』第二六号 一九七一・六 後『樋口一葉の世界』平凡社 一九七八・一二 所収）の中で述べているように「にぎりえの後半を死の世界、不条理の世界として捉え直す」という見地も生まれてくる。しかし、これに対して、北川秋雄は、「にぎりえ」論——〈狂気〉の行方」（『一葉という現象』双文社 一九九八・一〇 所収）の中で、結びの〈恨は長し〉という語り手の感想あるいは、人魂の話はこれまでの「にぎりえ」論で欠落してきたこと

を指摘し、また、「お力については、死後の救済はないと考えるべきであろう。お力が、〈恨み〉を残して死んだという結びこそは、透谷や天知ら『文学界』同人らの心中観とは一線を画す一葉の、死生観が露出している」という示唆に富む指摘をしている。

(注二) 渡部芳紀は、「にぎりえ」論『解釈と鑑賞』至文堂 一九八五・九)の中で「恋愛小説として読む」ことの必要性を述べている。

(注三) 注二と同じ。

(注四) お力が太吉にカステラを買い与え、それがお力と源七の心中といった事件に発展していくが、お力には太吉への深い罪意識がある。

(注五) お力の心の病を読む主な論として、前田愛は、『にぎりえ』の世界』(『近代文学の女たち』岩波書店 一九九五・八 所収)の中で、「離人症」「幻聴」「空虚なものを抱えているお力、あるいは死の世界を抱えているお力」と指摘している。北川秋雄は「にぎりえ」論――〈狂気〉の行方』(『一葉という現象』前出注 所収)の中で、「お力と父と祖父に共通する〈気違ひ〉とは、塚田満江や前田愛のいう病理学的なものではなく、自らが置かれた社会や現実に対する違和感、すなわち自己同一性の喪失という実存的なものであることがわかる」と指摘している。なお、秋山駿は、「文学の葉脈(十九)――樋口一葉『にぎりえ』」(『新潮』新潮社 二〇〇五・九)の中で、「ラスコーリニコフ的歩行」といい、「単なる何でもない人間の内面を、一つの存在のように確立する」ことで近代文学のはじまりと指摘している。

(注六) 岩見照代は『にぎりえ』論』(新・フェミニズム批評の会 『樋口一葉を読み直す』一九九四・六 所収)の中で、お米をこぼしてしまったエピソードの意味を「幼いお力を襲った、〈無垢性〉の崩壊であり、自己同一性の動揺といった実存的なレヴェルの問題」と指摘する。

(注七) 北田幸恵は、「はかなき階級」のゆくえ――一葉のなかの娼婦たち』(岡野・長谷川・渡辺編『買売春と日本文学』東京堂 二〇〇二・二)の中で、朝之助は、「傍観者の位置を踏み越えることはない」とし、「野暮にすべてを投げ捨ててお力に迫る源七とは対局の男性」として、「近代の無意識の男性の加害者が埋め込まれてい」と指摘している。

(注八) なぜ泊めたのかの解釈として、山本洋は「にぎりえ」の丸木橋』(『東大国文』国語国文』一九七八・四 後、『群像 日本の作家3 樋口一葉』小学館 一九九二・三 所収)の中で、「お力は、源七を捨て結城に身をまかせる方向にあえて決心する」とし、前田愛は『にぎりえ』の世界』(『近代文学の女たち』岩波書店 一九九五・八 所収)の中で、つながるものは「体しなく、だから泊めたという解釈を示し、また、松坂俊夫は、『にぎりえ』論』(『増補改訂 樋口一葉研究』教育出版センター 一九八三・一〇 所収)の中で、「自分の心を知ってくれて、共に生きてゆくことができるかもしれないという期待」説をとり、田中優子は、『樋口一葉』「いやだ!」と云ふ』(集英社 二〇〇四・七)の中で、お力の女としての「甘え」が見えるといい、「これが書ける一葉は、「甘え」を知っている」と述べている。

(注九) カステラを与えた意味については、今井泰子「にぎりえ」私解』(『日本の近代文学――作家と作品』角川書店 一九七八・一一 後、『群像 日本の作家3 樋口一葉』小学館 一九九二・三 所収)の中で、「源七に復縁の意志を暗示した」という読みをしめしているが、三好行雄「一葉と日本近代の底辺――「にぎりえ」を中心に」(『国文学 解釈と教材の研究』学燈社 一九八〇・一二 後、『群像 日本の作家3 樋口一葉』小学館 一九九二・三 所収)は、「みごとな縁切り状」といい、高田知波は「声というメディアアー」『にぎりえ』論の前提のために』(樋口一葉研究会編『論集 樋口一葉論』おうふう 一九九六・一一 後、『樋口一葉論への射程』双文社

一九九七・一一 所収) 所収)の中で、直接ではないが、「新しい男に取って代わられたことを暗示するサイン」と述べ、岡野幸江も「警八風」と酌婦たち―樋口一葉「にぎりえ」の「こんな業体」(前出)の中で、「愛想づかし」と指摘している。

(注一〇) 遠藤伸治・有元伸子の「樋口一葉」に「にぎりえ」における性の二重規範」(広島大学近代文学研究会『近代文学試論』一九九七・一二)の中で、〈心中〉ではなく、〈殺人〉なのだという読みを提示している。

(注一一) この点については、拙論「孤独の差異を生きる男と女の物語―『雪国』論」(『文学の中の他者』 青柿堂 一九九八・九)の中で、『雪国』は、男と女の一夫一婦制を絶対化した単一、単層では単純に切れない、男と女の複雑、多層な愛の関係性の一つを照らし出しているテクストとして評価している。

(注一二) 岡野幸江は、「警八風」と酌婦たち―樋口一葉「にぎりえ」の「こんな業体」(『私たちの記憶 近代』の解体と女性文学』双文社 二〇〇八・四)の中で、お力は、「近代娼制度というジェンダー構造がもつともあからさまに表出した世界のなかで生きざるを得ない酌婦」であったと指摘している。

(注一三) 一葉が「にぎりえ」でみつめていたのは、どう変わろうと思ってもかわりようのない貧しい〈女〉の哀しみである。例えば、田岡嶺雲は「一葉女史の『濁江』」(『明治評論』一八九六・二二)の中で、下層階級の女性への「無量の同情をそそぎ細やかにその同情をうつし来る」ものとしてかなり早い段階で指摘しているし、「近代の初頭の頃を生きた女たちの孤独と哀しみが、トータルな表現をみた最初の作品」(藪楨子「樋口一葉「にぎりえ」」(渡辺澄子編『女性文学を学ぶ人のために』世界思想社 二〇〇〇・一〇)、「抑圧をしいられた当代の女性の苦悩に対する熱い共感」(佐藤泰正「一葉をどう読むか―『にぎりえ』を軸として―」(梅光学院大学日本文学会『日本文学研究』二〇〇七・一)等々として続けている。

付記、本文引用は、『にぎりえ・たけくらべ』(岩波文庫)から。

★本論文は、『読まれなかった〈明治〉―新しい文学史へ』(双文社 二〇一四・一一) 所収